

## ＜ぼくらはニワトリ＞の解説

城 雄二

わたしは15年ぐらい前に、公害問題に取り組み、有機農業にも興味を持ちはじめていました。そのころ、愛媛県の伊予市で、自然に近い農業をやっていた福岡正信さんを訪ね、見たり聞いたりしたことをもとにこの授業書を作りました。福岡さんはとても熱心な農業の研究者であり、実践者です。その農場のみかん山に登ると、黄金のみかんと深緑の葉が空の青さを引き立てて、なにかしら自然の中で人間が生きている喜びを感じさせてくれます。

そんな山に、100羽の廃鶏が放たれたのです。わたしが、そのみかん山を訪れたのは、鶏が放たれてちょうど1か月たったごろでした。その夜、わたしは、福岡さんからこの鶏の話を手小屋で聞き、はじめはほんとかしらと思いました。

翌朝、みかんの木の間を散歩していると、4、5羽の「その」鶏がちょうどこちらに向かってやって来ていました。とても元気で、さつまいもにかじりついたり、みかんに飛びついて食べたり、4、5メートル飛んだり、思うぞんぶん遊びまわっています。その勇ましさにわたしは思わずたじろいだほどです。その姿を見て、わたしは福岡さんの話をようやく納得しました。鶏は確かに30羽ぐらいしかいませんでした。

西尾仮説サークルの犬塚清和さんたちは、廃鶏を6羽もらってきて、今まで庭で飼っていた10羽といっしょにしたところ、すぐに、餌を食べたり遊んだりしたそうです。どういう違いでしょう。先輩がいる効果かなと思っっています。

ともかく、福岡さんの農園の鶏の話は、わたしには「鶏」のこととは思えませんでした。そこで、この話を大人の集まりでしたところ、評判がよかったので「授業書」にしました。子どもたちにやってみても、評判がいいようです。さらっと、やっていただければと思います。

この度、全体の暗いイメージを明るいイメージに変えたかったので、少し改訂しカットも入れました。なお、＜ぼくらはニワトリ＞と＜親類＞のカットは、表紙の絵も描いて頂いている白竹邦江さんに描いて頂きました。